

若者震災語り部の語りのカタチー「語らいの場」の創出ー  
 Creating a dialogic relationship for youth storytellers of the earthquake and tsunami

○中野元太・諏訪清二

○Genta NAKANO, Seiji SUWA

The study aims to gain an overview of the young storytellers of the Great East Japan Earthquake, focusing on why they talk, how they talk, how they are transformed through the process of talking, and so on. "Kataraino-ba (dialogic space)" is also implemented to solve the disagreements faced by the young storytellers. Therefore, the interviews were held for 17 young storytellers and their stories were categorized into the nine themes. Through these interviews, the participants expressed "the hurt that storytelling causes in the relationship between young people and their surroundings" and "discrepancy between their own narratives and the dominant story". Thus, "kataraino-ba" was implemented to establish a trusting relationship between storytellers and listeners.

### 1. はじめに

東日本大震災以降、若者が震災体験を語る活動が顕著になっている。阪神・淡路大震災後にも、幼い頃の震災体験を高校生の言葉で綴る「語り継ぐ（舞子高校環境防災科、2005年～）」や、人と防災未来センター等が実施した「ユース語り部事業」（2008年）が行われたが、これら若者が語る活動は震災から10年以上が経過した後だった。

一方、東日本大震災では、若者が震災体験を伝える取り組みが直後から各地で行われた。宮城県女川町での「いのちの石碑プロジェクト」、岩手県釜石市で津波避難した中学生による語り、宮城県石巻市での大川小学校卒業生による校舎保存活動とその後語り部活動など、詳細は割愛するが、震災直後から若者による語り部活動が見られた。

本研究は、若い世代が東日本大震災の体験を語るということ、言い換えれば、なぜ語り、どのように語り、語ることを経てどのように変容しているのか、という語ることの全体像を概観することを目的とした。さらに若者らが直面する語り部活動にかかわる課題解消に向けて「語らいの場」を実践した。ここでの若い世代とは、便宜的に、東日本大震災当時、小学生以上、高校生以下、であった世代と定義している。

### 2. 研究のデザイン

本研究の手順は、①インタビュー対象者の抽出、②インタビュー項目の検討、③語り部に対する事前アンケートの実施、④語り部へのインタビュー、

⑤インタビュー内容の分析、⑥語らいの場の実践からなる。語り部が安心してインタビューを受け、語り部の特徴に応じたインタビューができるよう、①から⑤の全てのプロセスを実施する前後で、臨床心理士（スクールカウンセラー）、心のケアに関わる大学教員、若者語り部（インタビュー対象者のうち2名）、若者語り部が震災当時通っていた学校の教員、筆者らで検討会を行った。

協力が得られた語り部は17名で、被災体験場所は、岩手県（釜石市、陸前高田市）、宮城県（気仙沼市、石巻市、東松島市）、福島県（浪江町）である。半構造化インタビューで実施し、被災体験、語ることによる聞き手の変化、語り部としての活動環境、語ることによる語り部自身の変化、語りの教育的効果について聞きながら、語り部の発話に応じて自由に話題を展開するスタイルとした。

各インタビューは、概ね1時間半から2時間で、インタビュー結果は全て文字起こしし、筆者らが語りを内容分析した。また、分析結果は、検討会でも共有して、分析結果の妥当性を確認した。

### 3. インタビュー結果

インタビュー対象者の全員が、津波による自宅流出、津波からの高台避難、原発避難、避難所生活のいずれかを体験している。内容分析結果を以下に示す。

（1）「社会的な意味」と「個人的な意味」を持つ語りの混ざり合い

前者は、経験に基づく災害時の適切な対応や知

識についての語りであり、後者は自身の被災体験の中での人とのかかわりや心の揺れ、辛さなどについての語りである。語りはこれら両者の混ざり合いから成っている。

#### (2) 語り部の始まり

ともすれば震災体験を伝える正義感や責任感に駆り立てられて語り始めたと思われがちであるが、実際の語り部の始まりは「部活を引退してふと時間ができた」や「先生に語ってみないかと誘われた」などが主な理由であった。

#### (3) 語りの工夫

聞き手も身構えて、緊張していることが多い。そのため、震災前の日常生活について語り、写真や音楽を取り入れて、緊張をほぐすことも心掛けながら語っている。

#### (4) 語りの葛藤

語ることへの様々な葛藤を抱えている。「大きく被災していない私が話していいのだろうか?」「自分がしゃべることによって人を傷つける」「被災地の体験を被災していない地域で伝えると、私が被災者代表と捉えられかねない」など、必ずしも語ることの全てを受容できているわけではない。

#### (5) 語りに対する評価

「話を聞いた人が1年後に再訪してくれて、家具を固定した写真を見せてくれた。受け止めてもらえたと思った」や感想文をもらうなどのフィードバックが得られることで伝わったと感じる。

#### (6) 語れなかった時間

語れなかった時間もある。他県に進学し、「私が、家が流されたと言ったら多分雰囲気が重くなるだろう」、「自分の言葉で発信するまでに5年かかった」、「年齢を経て言葉を獲得して体験が重くなった。それでより悲しみとかが、震災当時よりも今の方が強くなってきている」など、環境や成長によって語れなかった時間もある。

#### (7) 語る苦しさ

「語る内容は嫌な思い出、トラウマ。感情をはさむと僕自身が耐えられない辛い体験だからこそ話したい時もある」、「一人で結構抱え込んでしまう癖がある」など、震災から時間が経過しても、語ることへの苦しさを吐露する語り部もいる。

#### (8) マスコミの功罪

マスコミによる決めつけ、曲解、誤解によって、語り部の語りの一側面だけが強調され、記事の内容に傷つくことがある。一方、長く語り部と付き合い合うマスコミの存在が、語り部のよき理解者にな

ることもある。

#### (9) 語りによる心のケア

「結局は、今はまだ自分のために話しているという部分がすごく大きい」「つまり、気持ちの整理の過程を見せている」というように、語ることが自身のケアとなっている側面もある。

### 4. 喪失と回復の二面性

これらインタビューを通して「語ることが若者と周囲との関係に傷をもたらす」ということ、そして「自己の語りとドミナントストーリーとの差異への戸惑い」が表明された。前者は、語り部に対する「まさしく the 同情」や、「重苦しい雰囲気から抜け出せない」といった言葉に代表されるように、語り部と聞き手との間の信頼関係が築かれず、語ることによる傷つきを表現している。

後者は「どんな話をしてしても「奇跡」という言葉でくくられてしまう。震災前の日常や学校生活はなかったことにされてしまう」という言葉からも読み取れるように、若者の語りが都合よく捨象され、社会的ドミナントストーリーが形成されていく一方で、語り部は自己の語りとのギャップに苦しむことになる。このように、若者語り部活動にはケア的側面や教育的側面がある一方で、社会との関係に新たな傷を生じさせるという、喪失と回復の二面性を持つことになる。

そこで語り部と聞き手の間の信頼関係を形成し、語り部による語りと聞き手による語りとが交流する場として語らいの場を2022年から2023年にかけて4回実践してきた。語らいの場とは、「語り部も聞き手もお互いが誰であるかがわかっている場（匿名性のない場）」「語り部の語りに誘発されて聞き手も自らの体験を語ってもよい場」「語り部も聞き手も語らないことが尊重される場」である。このような対話的な場の形成によって、語り部も聞き手になり、聞き手も語り部になりながら、そして、ある語り部がほかの語り部を誘発していくことによって、語り部と聞き手の双方の語り部が交流していく。このことは、語り部に前述した喪失を体験させることなく、語りのケア的、教育的側面を高めていく。

#### 謝辞

本研究は Yahoo! 基金 被災地復興調査助成「ユース語り部が持つ心のケア力&防災教育推進力向上事業」の成果の一部です。